

財団だより

# 多摩川

1990. 9 第47号



ツマキチョウ・夏型(シロチョウ科)  
 開張48mm。翅の先が黒のクチバシのように曲がっている。まは  
 この部分がオレンジ色でまは白。  
 食草ハタザオ、タネツケバナ。



奥多摩のキャンプ場(青梅市川井、1990. 8)

## ■多摩川現風景■

### (3) アウトドア・レクリエーション

夏になると本屋の雑誌コーナーには、アウトドア・レクリエーションに関する専門書や特集本が所狭しと並ぶ。この10年間に創刊された専門の月刊誌も数種類あって、どうかするとカタログ雑誌と間違えそうなものもある。

ともあれ、アウトドア・レクリエーションのフィールドは川や湖が圧倒的に多く、多摩川も何回か特集が組まれたことがある。

多摩川が郊外レクリエーション地域として親しまれ始めたのは古く、大正時代にはいくつかの日帰り行楽圏の案内書が出され、多摩川は自然系のレクリエーション地域として紹介されている。

そして今日、多摩川は奥多摩を代表として下流に至るまでのあらゆる場所で、実に多様なレクリ

エーション行動がみられる。釣り、水遊び、カヌー、ボート、デイキャンプ、沢のぼりなど地形や流水を生かしたのものから、広々とした景観を楽しむために実に多くの人が集まってくる。つい先日河口近くでは水上スクーターが爆音を轟かせながら走りまわっていた。しかし、ブームとはいえ川らしい遊び方への配慮を忘れてはならない。

#### ●関連する財団の研究助成及び刊行物 学術研究

- ①多摩川上流いわゆる奥多摩地域の環境保全のための資源調査及び応用地理学的研究  
 徳久球雄 1982 No.62
- ②河川沿川の都市的土地利用の特性把握に関する研究 中島将勝 1986 No.96  
 財団出版物
- ①多摩川'86「川を使う」 1986年

## 多摩川散歩

### ● 川崎大師

川崎市教育委員会 三輪修三

隅田川下流域に存在した浅草及び吉原、両国、深川などは、江戸の市井人にとって封建秩序に拘束され、世俗の関係が支配するうっとうしい市街から逃れる特有の祝祭的空間であったという。そこに江戸庶民文化が生れたが、多摩川の場合も、近世後期になって江戸の人口が膨張すると、とくに多摩川河口六郷流域は次第に江戸人の生活圏に接近し、やがて穴守稲荷や川崎大師平間寺を核とする遊興空間が形成された。川崎大師付近は現在でも江戸の下町的な雰囲気濃厚にとどめている。

幕府の御用により文化5年師走から翌春にかけ、多摩川通りを巡検した大田南畝は、巡検中しばしば川崎大師を訪れた。その紀行文『調布日記』同6年3月8日の項をみると、河口六稲荷新田で塩焼きの様子を見聞したあと大師へ詣で、

去年の師走17日と26日に詣でしなり、42の厄とやらんいうもの除かんと、必ず人の詣でくる所なるを、去年60にして始めて詣でて、今日まで三度来れるもおかし

と記している。すでに厄除大師の名は人口に膾炙していたのである。

大治3年(1128)、漁師の夫子が網を打つと魚の代りに、カキがらの一杯付着した弘法大師像がかかる。漁夫はこれを引きあげ小堂を建立して祀った。川崎大師の始源を伝える「縁起」である。謂ゆる海上漂着神の伝承であるが、川崎大師が素朴な地域の庶民信仰からスタートしたことを窺わせる。しかも注意すべきは殆んど同じストーリーで、大師の手本になったと思われるのが隅田川の浅草寺縁起、こちらは観音像となっている。いずれにせよ同じ文化的土壌のなかで、浅草寺の影響下に形成された縁起の可能性が示唆されるのである。

大師は第二次大戦の戦災で伽藍が消失し、貴重な文化財の多くを失った。現在境内に大師信仰の歴史を伝える2つの記念すべき石造物がある。

1つは寛永5年(1628)3月銘の六字名号碑、今1つは寛文3年(1663)5月の銘がある「これより弘法大師への道」と記された道標である。

前者については浅井了意の『東海道名所記』に次のようなエピソードが記されている。

江戸京橋に酒を商う紀伊国屋作内という人物がおり、日ごろから大師をあつく信仰し、しばしば参詣、ある時、大師からの帰路筆を拾い持ち帰って墨をすり筆をとると無筆文盲の彼がすらすらと六字の名号を書いた。彼は随喜してこれを石塔に彫りつけ大師へ奉納したという。

一方後者は関東地方に残る石製道標としては年代の古工、スケールの大きさ、書風の雄勁さ等において他の比肩を許さぬ名品と高く評価されている。いずれも大師の庶民性と江戸時代における隆盛を物語る資料である。

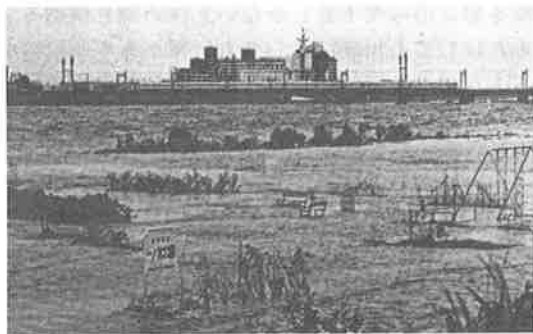
江戸湾に臨み、江戸の境界となった多摩川河口は、川と海の接点であり、庶民文化のゆたかな土壌であった。

### 案内図



「ふるさとかわさきめぐり」川崎市教育委員会 (S59.7発行) より転載

## 私と多摩川



増水し、河川敷のテニスコートが水につかった多摩川。  
昭和49年9月1日、関戸橋上流・一宮公園付近。

小峰書店編集長 伊藤素樹

ゴーゴー、ゴーゴー

寝床で、遠くひびく聞きなれない音に、目をさしました。昭和49年9月1日のことである。

前日の台風が去り、風雨はやみ、青空がのぞいていた。着替えをすませると、外へでた。

道路では、音はますます大きく聞こえてくる。雨上がりの道を、近所の人々が心配そうに、足早に川へ向かう。私も、いそいでカメラを手にすると、多摩川へ向かった。

土手からながめると、多摩川は、およそ400mの川幅いっぱい流れ、つい一月ほど前に完成した、川原の一宮公園をおし流していた。ブランコやすべりだいも水につかっている。

家に帰り、テレビを見ると、狛江の土手がぐずれ、人家が流されていた。飼い慣らされていた多摩川が、反乱をおこしたのだと思った。

私が多摩川へ歩いて3分ほどの多摩市一宮に越したのは、その事件がおこる2年ほどまえのことだった。

子どもが生まれるまえは、多摩川に興味を持たなかった。日曜日といえば、女房とふたりで、デパートなどをぶらつくほうが多かった。子どもが生まれると、子どもと散歩に行くようになり、自然と多摩川の川原に向かうようになった。

広々とした川原には、いつも風が吹いていて、夏でも気持ちよい。草むらでは、バッタやトンボ

が多く、ボール投げやタコあげなど、広い川原はどんなに人が多くても、自分たちの場所を見つけ、遊ぶことができた。

わざわざ電車にのって、釣りはもちろん、キャンプ、ゴムボートのり、野草つみ、鳥の観察などのためにやってくる人たちも多いが、川原にいる人たちの大半は、近所の人たちである。朝夕に、ジョギングするおじさん、サイクリングの少年など、土手でもじつに楽しそうである。

人々はなぜ、こうも川へ遊びに行くのだろうか。当時の関戸橋付近では、まだ泡がたち、けっしてきれいとはいえなかった。川の中に入ってもなんとなく異臭がするし、ヒルがいて、石にはコケがはえ、ぬるぬるとすべった。現在でも、さすがに泡はへったが、川に入って泳ぎたいとは思えない。釣り人も、けっしてこのあたりで釣った魚を食べないだろう。

川の魅力は、いろいろあると思うが、私にとっては、その巨大なぜいたくな空間である。このことは、飛行機に乗っても、新幹線に乗っても感じることだ。隅田川のように、放水路となった川には、ぜいたくさを感じることはできない。

多摩川の川原も、ともするとゴルフ場や野球場、駐車場、公園などになっていく。まるで灌木やヨシが生えている川原は、無駄だと思いこんでいるようだ。しかし、こうした野球場や公園などの人間が勝手に決めつけた場所というのは、つまらない。野球場の理想を追っていけば、川原はみな東京ドームになり、川は暗渠となるだろう。

戦後の近代化とは、子どもの遊び場だった道路を自動車で、空き地をビルでうばい、その代償に、ささやかな公園をつくることだったのか、と思うのは、私だけだろうか。せめて、川原だけは、だれもが勝手に自分で遊べる空間として、土地を手に入れることが夢となった大人たちに、ぜいたくな巨大な空間として、深呼吸の場所として残しておいてもらいたいと思うのである。

よみがえ

## 甦れ！多摩川

水遊び危険のキャンパ  
(青梅市沢井)

## 多摩川紀行

## ⑥ 川井～沢井 (4.5km)

## 山道省三

昨年の10月、川井までカヌーで下った時、また今年の2月地上から歩いて見た時、川の水の少なさが気になっていたこともあって、川井～御嶽～沢井のコースは、カヌーで下るには難しいのではないかと勝手な想像をしてしまった。しかし、御嶽地区は川の中に大きな石があり流れに変化があって、競技用のカヌーの訓練やカヌー教室が開かれる場所でもある。ずい分迷ったあげく、今回はカヌーではなく川底を歩いて下る事に決め、8月14日出発した。

川底を歩くといっても、ハイキングではないから水に入り泳ぐことも考え、ウェットスーツ、溪流釣り用の地下たび、ライフジャケット、ヘルメット、それに荷物を運ぶためと泳ぐ時の浮き袋を兼ね小さなエアマットを用意した。ところが、現地に着いて見ると台風による増水らしく相当な水量があって、皮肉な事にカヌーにとっては絶好のコンディションである。事前の情報収集はまめに行なう必要があるとの教訓であろう。

気温36度、水温17度。約20度の差は相当な冷たさを覚える。幼い頃、盆には地獄の釜が開くといって川遊びはきつく戒められたものだが、旧盆の頃になると秋の気配ができて、確かに水温が低くなることを憶えている。

それにもかかわらず、川井の川原のキャンプ場はテントで埋まっている。そして冷たい水や急な流れの中で平気で泳いでいる人達がいる。水際を半分水につかりながら川下りを始めるが、淵や急瀬にあってなかなか進まない。どうしても進めない所はエアマットにつかまって流れを泳ぐことになる。ライフジャケットを着け、エアマットにつかまって泳いでも流心には恐くて近づけない。水

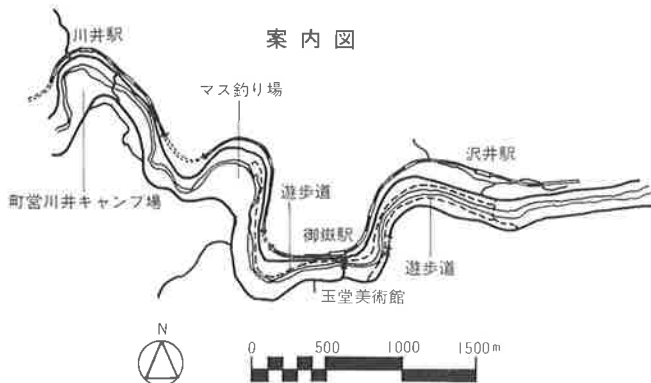
際を岩に沿って下るしかない決め淵を横切る。それにしても川底に少しでも川原がある所には必ず人がいてキャンプしたり釣りをしている。何が釣れるのかと聞くと、ニジマスやヤマメが釣れるらしいと答えてくれるが釣果はあまりないようだ。

川井の町営キャンプ場から1.5km程下ると、民営の奥多摩フィッシングセンター(ます釣場)があって、本流から分流して釣り場を設けている。ここも増水のため釣りをしている人は少ないが、川ではひしめきあうように水遊びをしている。

このます釣場から左岸側には遊歩道があって、御嶽から沢井まで約3km川沿いを歩ける。御嶽駅前あたりから下流は右岸側にもあってちょうど良い散歩コースである。この付近の流れは、前述したように河床に大きな岩がいたる所にあつて、急瀬や落ち込みが連続している。今やカヌーイストにとってメッカとなっているが、とても泳いで下ることなど不可能で遊歩道を歩くことにした。

この遊歩道を歩いていると、実にさまざまなキャンパンを目にする。地区の子供会、PTA、教育委員会、警察などによる川遊びの危険性を呼びかけたものだ。10mおきぐらいにたてられている。それにもめげず、水辺には人があふれている。今や笑い話のように言われるが、多摩川沿いの小学校は川で遊ばないように指導している所が多く、子供達は遠くから来て遊ぶ人達を横目で見ていただけらしい。川沿いの子供が遊べないで遠くの子供が遊ぶ川とは一体どういうことだろうと思う。禁止するより遊び方を積極的に教えた方が、むしろ安全なのではあるまいかと思ってしまう。

終点の沢井は左岸側に酒造所の野外レストランがあって座る場所もないくらい混雑していた。それにしても夏休みとはいえ川井から沢井の間には軽く二、三千人の人がいたように思う。



## 財団からのお知らせ

### 〈研究助成報告書完成〉

助成集報（第17巻）並びに多摩川環境調査助成集（第11巻）が完成しました。

内容は下記のとおりです。

### 助成集報第17巻

研 究 課 題	代 表 研 究 者	所 属
● 多摩川中流域における流域環境整備のための調査研究（より良い河川環境の創出を目指した流域環境管理計画策定手法の開発）	井 手 久 登	東京大学農学部教授
● 多摩川・秋川合流地域の歴史的研究	多 仁 照 廣	敦賀女子短期大学日本史学科教授
● 近世（江戸時代）以降の多摩川流域の下水文化の変遷と考察	稲 場 紀久雄	下水文化研究会代表
● 玉川上水の再通水が水環境に及ぼす影響に関する研究	田 瀬 則 雄	筑波大学地球科学系講師
● 多摩川下流域・河口域における石油化学物質の微生物分解による浄化能力に関する研究	村 上 昭 彦	東京農工大学工学部教授
● 多摩川における魚類の生息環境と免疫学的研究	出 口 吉 昭	日本大学農獣医学部教授
● 多摩丘陵内の段丘堆積物の珪藻化石群集とその堆積環境	大 西 一 博	東京都立大学理学部助手
● 多摩川流域における緑地保全・景観保育のための樹木の生育密度と群落の空間構造に関する研究	大 山 陽 生	明治大学農学部教授

### 多摩川環境調査助成集第11巻

研 究 課 題	代 表 研 究 者	所 属
● 多摩川上流域の陸水学的研究（特に、奥多摩湖から羽村堰まで）	角 田 清 美	都立小平南高等学校教諭
● 多摩川下流域における築堤がもたらした堤内地の環境変化に関する史的研究	平 野 順 治	大田区郷土の会会長
● 日野市における水路の生物環境、景観要素および利用意識調査による環境特性の研究	渡 部 一 二	多摩美術大学助教授
● カードとパソコンによる多摩川原の植物の同定	大 川 ち 津 る	都立小山台高等学校講師
● 多摩川流域における褶菌類の分類と生態に関する研究	嶺 川 正 勝	前、町田市立南第一小学校校長
● 水路式開放型浸漬濾床法浄化施設による多摩川水系の啓蒙と中流魚（ウグイ）の増殖について	日 高 万 典	世田谷区立瀬田中学校教諭
● 多摩川上流山地の積雪と融雪に関する研究	下 川 和 夫	札幌大学女子短期大学部講師
● 児童・生徒・市民のための多摩川研究観察ガイドの調査研究（多摩川教育河川化構想と実践）	島 村 勇 二	前、府中市立第七中学校校長

# 《多摩川およびその流域の環境浄化に》 《関する調査・試験研究募集—第二次—》

社会的に環境問題についての意識が高まるにつれて、多摩川及びその流域の環境改善に関する調査研究にも、今まで以上に意欲的な研究が増えてきました。

河川の環境改善には、流域でのこまめな対応が必要であることは言うまでもありません。水質問題や水量の問題についても流域における都市計画やまちづくりから、市民一人一人の家庭生活に至るまで幅広い対応が図られなければなりませんし、技術的な課題だけではなく市民の意識の問題にまで関わってきます。

このように河川の水環境だけを見ても、従来の研究手法を超えて新たな視点、着想が求められるようになってきました。

財団は民間の助成機関として河川環境改善に関する、こうした意欲的な研究を求めています。研究分野や所属を問わず、多くの方が研究に参画していただくことを望んでいます。

**公募締切日 平成2年10月9日**

応募についての詳細は下記事務局までにご連絡下さい。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目16番14号

(地下鉄ビル内) 電話 (03) 400-9142

**(財)とうきゅう環境浄化財団**

今までの申請・採用状況 (新規)

年度	種 類	申請件数	採用件数	年度	種 類	申請件数	採用件数
50	A類	7	6	59	A類	18	9
51	A類	13	5		B類	8	4
					計	26	13
52	A類	31	17	60	A類	37	15
	B類	8	6		B類	12	9
	計	39	23		計	49	24
53	A類	17	8	61	A類	21	6
	B類	6	6		B類	11	9
	計	23	14		計	32	15
54	A類	19	11	62	A類	24	9
	B類	8	7		B類	6	6
	計	27	18		計	30	15
55	A類	20	12	63	A類	30	10
	B類	10	7		B類	4	4
	計	30	19		計	34	14
56	A類	16	9	平成 元	A類	31	8
	B類	11	4		B類	3	3
	計	27	13		計	34	11
57	A類	28	17	2 第1次	A類	24	8
	B類	12	8		B類	6	3
	計	40	25		計	30	11
58	A類	25	10	合計	A類	361	160
	B類	11	8		B類	116	84
	計	36	18		計	477	244

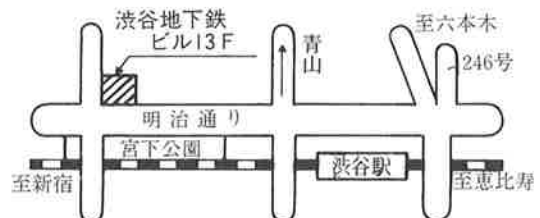
・発行日 平成2年9月1日

・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団

〒150 渋谷区渋谷1-16-14

(渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03)400-9142



\*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1  
TEL (048)831-8125